

太宰府の文化財

415

古代大宰府の官庁 蔵司跡

古代の大宰府は九州各国を統括する官庁としての機能があり、記録から学校院(府学校)、兵馬所(兵馬司)、

蕃客所、主厨司、主船司、匠司、修理器仗所、防人司、警固所、大野城司、葉司、主神司、蔵司、税司、大帳所、公文所、貢上染物所、



発掘調査中の蔵司跡（北西から見た礎石建物）

作紙所、貢物所、政所などの行政を担当する部署があったとされ、また、大判事、陰陽師、算師をようする官庁などもあったとされています。このように大宰府には都と並ぶ官庁街があったと考えられており、特別史跡大宰府跡やその周辺にこれらの役所があったとされています。なかでも蔵司は大宰府の財政

を担う機関で、九州各地から集められた絹などの特産物などを収蔵・管理し、役人に季禄という報酬を現物支給で分配する行務などがおこなわれていたとされています。学院中学校と大宰府政庁跡に挟まれた丘陵にその地名が残り、丘の上に礎石が残されていたことから、古くからこの場所が「蔵司」跡であると思われるようになりました。長らく個人の所有地でしたが、土地が公有化された後の平成21年度から九州歴史資料館によって計画的な発掘調査が始まり、じょじょに蔵司跡の古代のようすが明らかになってきました。

蔵司の丘陵は南側には5つの平坦な土地が段差をもって東西に広がっており、北西側に巨大な瓦葺の礎石建物が検出され、その南側は広場のような空間になっていました。礎石建物は政庁正殿をしのぐ規模の建物で、その用途は倉庫や政務をおこなう管理棟、外国使節の饗応施設などの複数の考え方があります。平坦地の中央から政庁のある東側には中央に広場を持ち、「コ」の字に配置された6棟以上の瓦葺の礎石建物が見つかっています。礎石建物は建物の側だけでなく建物内にも基盤の目のように礎石を配置した総柱という方式のもので、重量物を支える床に適した構造であり、倉庫群と呼ぶにふさわしい建物であったことがわかりました。建物は出土した土器や瓦から奈良時代から平安時代前半期に使用されたものとされています。

調査ではこの建物の下層から7世紀にさかのぼる時代の整地と掘立柱建物が発見され、東側の政庁域と同じく奈良時代より以前から官庁として機能していたことが指摘されています。『日本書紀』天武六(677)年十一月一日条に筑紫大宰に「大宰府諸司人」の記事があり、大宝律令施行以前にこの地に行政機能を担った役所があったことも考えられます。このように蔵司跡から見つかった建物群は時代によりさまざまな性格を帯びた施設であった可能性が考えられ、調査成果に期待が寄せられています。

文化財課 山村 信榮

※現地は調査中で常時公開されていません。現地説明会などは広報紙などで事前にお知らせしています。